http//home.kobe-u.com/kinki-sha/

近畿学校保健学会通信

No.148

平成29年10月20日発行
近畿学校保健学会事務局
〒582-0026　大阪府柏原市旭ヶ丘3-11-1
関西福祉科学大学　大川研究室
TEL&FAX：072-947-1307
Mail：kinkigakkohokengakkai@yahoo.co.jp
振込口座　00940-5-181826

目　　次

故 米田幸雄先生追悼文 …… 2
故 安藤 格先生追悼文 …… 3
第64回近畿学校保健学会（平成29年度年次学会）報告
1. 第64回近畿学校保健学会を終えて …… 4
2. 一般講演座長報告 …… 5
3. 特別講演報告 …… 10
4. 教育講演報告 …… 10
5. 平成29年度近畿学校保健学会奨励賞 …… 11
6. 学会印象記 …… 11
平成29年度近畿学校保健学会奨励賞抄録 …… 13
平成29年度近畿学校保健学会評議員会・総会　報告 …… 14
平成29年度第1回近畿学校保健学会幹事会議事録 …… 16
学会新企画　第5回　研究の発表 …… 18
第6回研修セミナー …… 23
第65回近畿学校保健学会（平成30年度年次学会）案内 …… 24
編集後記 …… 24

会費納入と会員勧誘についてのお願い

本学会は会員の皆様の年会費を主な財源として運営しております。平成29年度の会費（3,000円）をまだ納めておられない方は，早急にお振込み下さいますようお願いいたします。

また，会員の皆様には，周囲の方々に本学会への入会をお勧め下さいますようお願い申し上げます。なお，入会案内パンフレットおよび入会申し込み用紙は，ホームページからダウンロード出来ますので，よろしくお願い申し上げます。

米田幸雄先生のご逝去を悼む

本学会の名誉会員米田幸雄先生が平成 28 年 8 月 16 日に逝去されました。享年 92 歳でした。ご生前の先生のお姿を偲びつつ，先生のお人柄や思い出の一端をここにご披露申し上げ，改めてここに哀悼の意を表したく存じます。

米田先生は昭和 34 年に京都学芸大学（現，京都教育大学）に衛生学担当助教授としてご赴任，その後，昭和 61 年に退職されるまで一貫して教員養成に携わってこられました。

先生は健康の維持増進をはかる予防医学を志し，環境とかかわる衣服衛生の研究を出発点として学校保健領域を専門に研究されるとともに，大学の保健管理センター所長を長年併任されてこられました。また保健科教育法の分野にも特別の興味を持たれ，本学会幹事や日本学校保健学会評議員を務めてこられました。

昭和 55 年度に本学会が京都で開催されることになり，米田先生が学会長を務められました。学会のメインテーマに「性教育」，特別講演に「発達期の性教育」を掲げられ，シンポジウムに「性教育のあり方」「学校における性教育」「10 代にみられる性の暴走」などの問題提起を企画されました。

米田先生と私（筆者）が同僚として勤務していた昭和 60 年頃，先生はほぼ毎日のように学内をジョギングされていました。ジョギングと健康の関係についての研究成果が盛んに発表されていた頃のことです。先生は予防医学を研究するだけでなく，ジョギングの効果を自らの身体を通して実感されておられたのでしょう。当時，高血圧症に対するジョギングの影響についても話題の一つでしたので，あるとき血圧への影響の有無を先生にお尋ねしたところ，先生は一言「全身の血流状態が改善されるので，血圧調整には効果があるのでは・・・」とのシンプルなご返答があり，先生らしい明解なお答えだと感じたことを記憶しています。

米田先生は，優しく温厚で丁寧な指導が好評で学生に人気があり，毎年多くのゼミ学生を引き受けておられました。何でも気さくに相談に応じて下さるところがあり，サッパリとした洒脱なお人柄であったように思います。ご生前，勲三等旭日中綬章を授けられました。

93 歳の誕生日を目前にしたご永眠でした。近畿学校保健学会への長年のご貢献と会員への暖かいご指導など，これまでにいただきました様々なご厚情に感謝申し上げるとともに，重ねて米田先生のご逝去を悼み，心からご冥福をお祈り申し上げます。

（近畿学校保健学会名誉会員・京都教育大学名誉教授　寺田光世）

安藤 格先生のご逝去を悼む

安藤先生は，平成 29 年 4 月 21 日にお亡くなりになりました。享年 96 歳でした。

先生は昭和 44 年に大阪教育大学養護教諭養成所に着任され，昭和 52 年から 55 年まで大阪教育大学学長に就任されました。この間附属天王寺小学校校長も併任されました。

先生は昭和 18 年に九州大学医学部をご卒業後小児科教室で「医は教育なり，教育は医なり」の信念に基づく実践研究についてご研鑽を積まれました。昭和 31 年大阪市立大学小児科助教授にご就任後は，大阪大学心理学教室との共同研究を行い，戦後わが国，児童生徒の“発達加速現象”の先駆的研究やパリ国際小児センターで開催された“社会小児科学や結核の予防と治療”に参加され，その成果を日本学校保健学会や日本小児科学会などに発表され，多くの論文は，同時代の研究者や関係教育者の刺激となりました。また，アレルギーの分野では，ぜん息小児のキャンプや水泳教室の指導など，時代に先駆ける集団入院治療の実践に貢献され，児童生徒の健全な発育発達のための研究と学校教育の向上に尽力されました。

先生の歩みは臨床医としての実践的治療と教育者としての児童生徒の健康的な発育発達のための社会環境の醸成のために真摯に取り組まれた一生であった，と心からの尊敬の念を抱きつつ，お別れの言葉にさせていただきます。

（近畿学校保健学会名誉会員・堀内クリニック院長　堀内康生）

第 64 回近畿学校保健会（平成 29 年度年次学会）報告

1. 第 64 回近畿学校保健学会を終えて

学会長　内海みよ子
（和歌山県立医科大学教授）

第 64 回近畿学校保健学会は平成 29 年 7 月 1 日に和歌山県立医科大学保健看護学部において予定通り開催されました。

近畿地区でも南に位置します和歌山県で無事に終えることができましたのも会員の皆様，企画運営委員の皆様，並びにスタッフの皆様の多大なご協力の賜物であり，心より感謝申し上げます。

本学会は「すべての子どもが生き生きと過ごせる環境を目指して」をテーマとし，特別講演は，アドベンチャーワールドで飼育部ふれあい課長を勤めておられます熊川智子氏に「ジャイアントパンダ飼育といのちのつながり」ついてのご講演をいただきました。人工飼育ではなく母親に育てられた経験を持つパンダは，母親になったときに子育てが上手という子育て連鎖の大切さを学ばせていただきました。

教育講演は，日本ウェルネススポーツ大学の近藤卓氏に「いのちの教育と自尊感情」についてのご講演をいただきました。自尊感情には社会的自尊感情（相対的・条件付・・）と基本的自尊感情（絶対的・無条件・根源的・・）があり，自尊感情の測定や自尊感情を育むための共有体験の重要性など，多くのことを学ばせていただきました。一人ひとりがいのちを肯定的に捉えられるようにと願うばかりです。中島みゆきさん作詞作曲の「**Remember**」をギター演奏と共に聞かせていただきました。

～生まれた時 だれでも言われた筈耳をすまして思い出して 最初に聞いた Welcome～

一般演題は 27 題の研究発表が 3 会場に分かれて行われ，各会場とも活発な討論が繰り広げられました。A 会場では，〈保健教育・学校保健史〉，〈ライフスキル〉，〈ストレスと精神的健康〉の領域，B 会場では，〈メディアと睡眠〉，〈食育・歯科保健〉，〈医療と教育〉の領域，C 会場では，〈疾患と生活習慣〉，〈物理的要因と環境〉，〈危険行動防止・進路指導〉の領域と，多方面からの発表があり，研究の幅の広さと学校保健の奥深さを体験いたしました。座長の先生方にはスムーズな進行にご協力いただき，感謝申し上げます。

学会終了後には，和歌山城近くのアバローム紀の国にて，ささやかな懇親会を開催いたしましたところ，32 名の方々に参加いただき，楽しい雰囲気で懇親ができましたことを併せてお礼申し上げます。

最後になりましたが，第 64 回近畿学校保健学会の奨励賞は，「中学生における塩分摂取量が血圧に及ぼす単独および肥満との複合影響」を発表された長友奈央さんが受賞されましたことを報告させていただきます。

2. 一般演題座長報告

第A会場

＜保健教育・学校保健史＞

座長　西岡伸紀（兵庫教育大学）

A－1　大学生を対象とした科目保健の理解度に関する研究（白石龍生）

高等学校科目保健の内容の理解度を明らかにするため，教育大学2回生246人を対象に，選択形式及び自由記述による回答を求めた。理解度は「疾病構造や社会の変化」「ヘルスプロモーション」「環境衛生活動」で高く，「薬物乱用」「飲酒・喫煙」「生活習慣病」で低かった。印象に残った内容は，「心肺蘇生法，応急手当等」「薬物乱用」「飲酒・喫煙」であった。また，クラスター分析によるクラスターは保健の領域とは一致しなかった。今後，理解度と印象との関連，各内容の授業実施時期と理解度の関連などの考察が期待される。

A－2　教員養成系大学生の外国人児童生徒に関する意識調査（井上文夫 他）

外国籍児童生徒の健康や関連問題に対する教員養成系大学生の知識や意識を明らかにするため，292名を対象に質問紙調査を行った。その結果，外国籍児童生徒の増加については6割が知っていたが，外国人学校での健康診断未実施は6%しか知らなかった。外国人に対する対応や担任になった場合の対応については肯定的回答が多かった。また，質問に対する回答において，外国籍の国による状況の違い，イスラム圏児童生徒の給食など異文化への配慮の必要などが述べられた。今後，合理的配慮等を踏まえた大学での指導の具体化が期待される。

A－3　学校保健の組織活動史研究（5）－地域私立衛生会雑誌の資料的価値－（高橋裕子）

明治後期の地域の医師による学校衛生組織活動を明治政府の学校衛生制度と関連づけて紹介するため，新潟，大阪，京都の「地域私立衛生会雑誌」を分析した。その結果，大流行したトラホームに対して，府県中心に予防対策が進められたこと，校医による治療には反対意見があったものの，校医が関わった事実が，また軽症者には教員が関わった可能性などが示され，地方や医師が率先して対策を推進したこと，医師が積極的に情報発信したことが認められた。今後，政府，府県等の施策，地域の学校医活動等の関連性のさらなる分析が期待される。

＜ライフスキル＞

座長　後和美朝（大阪国際大学）

A－4　小学生を対象とした目標設定スキル尺度の開発（筆野 元 他）

小学生を対象にした目標設定スキル尺度の信頼性が低いことから，新たな目標設定スキル尺度を開発するために行った予備的尺度項目の信頼性と妥当性を示した研究報告である。各尺度はセルフコントロール，レジリエンス，セルフエフィカシーの各尺度との間に弱いながらも相関関係がみられた。また，因子分析の結果，抽出された4因子についても，概ね信頼性の高い結果であったが，「柔軟な目標設定」のみ信頼性が低く，改善の余地がみられた。今後はさらに尺度の改善を行うとともに，学校現場での活用に期待したい。

A－5　中学生の生活習慣に関わる健康課題解決能力の形成 －ポジティブ・デビエンス・アプローチを参考にして－（小島奈々 他）

ポジティブ・デビエンス・アプローチを参考にして中学生の生活習慣の実態を明らかにした研究報告である。調査は自由記述式で行われ，KJ法によって分析した結果，食事，睡眠，運動，スクリーンタイム，家庭学習の生活習慣が抽出された。また，それぞれの生活習慣について改善点や改善の難しさ等が示され，中学生であっても健康課題について理解していることがうかがえた。今後は中学生が健康的な生活を送るための行動変容に結びつける具体的な要因（ポジデビ）を明らかにするだけでなく，それらの研究成果をもとに取り組んだ実践報告等についても期待したい。

A－6　高校生の意思決定スキル －構成因子及び生活行動等との関連性－（西岡伸紀 他）

高校生の意思決定スキル尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検証するとともに生活行動や危険行動等との関連性についての研究報告である。因子分析の結果，「意思決定の熟慮型（ステップ）」と「周囲の影響」の 2 因子が抽出され，尺度合計点やステップが高い者ほど生活行動の決定がより主体的で，危険回避的であることを明らかにした。また，自尊感情等の他の尺度との関連性からも今回作成した尺度はある程度の妥当性，信頼性がみられたが，相関係数等もそれほど高くないことから，さらに各尺度の改善を行うとともに，学校現場での活用に期待したい。

＜ストレスと精神的健康＞

座長　笠次良爾（奈良教育大学）

A－7　小学校高学年児童のレジリエンスと相談行動の実態及び相互の関連性（三浦祐佳 他）

ストレスに対して精神的健康を維持あるいは回復させる心理的特性であるレジリエンスに注目し，小学校高学年児童を対象として相談行動の実態及び相互の関連性について検討を加えた研究である。相談行動の頻度には性差があり先行研究と同じく女性で高く，場面毎に相談相手と得られた支援が異なる結果が得られ，レジリエンスを高める教育的支援の方策について示唆を得る発表であった。家庭環境や家族外の情緒的サポートなど，このレジリエンスを獲得するに至った外的要因について調べると，更に興味深い結果が得られるのではないかと思われた。

A－8　大学生の他者評価に対するストレス反応についての実験的検討（竹端佑介 他）

他者評価というストレッサーに対するストレス反応について，特に生体反応として心拍数の変化について注目した研究である。心拍数の変化は評価前の準備段階で評価なしと比べて既に高くなるが，主観的指標には変化が無いという結果であった。被験者自身が自分の発表を見ることができるフィードバックをかける形で行われたが，仮想的他者からのフィードバックは無い状態であること，仮想的他者を教員 3 名で設定していたが，この他者の設定によりストレス反応は変化する可能性があり，今後のさらなる研究に期待したいと思われる。

A－9　在日中国系留学生におけるストレス要因が精神健康度，睡眠健康度に及ぼす影響

（涂 静怡 他）

在日中国系留学生が抱えるストレス要因が精神健康度，睡眠健康度に及ぼす影響を調査した結果の報告である。精神的不健康と判断される留学生は 68.2%と非常に高く，交換留学生の精神的健康度が日本語学校学生や学部生よりも有意に高かったが，理由として交換留学生が経済的な保証があることが考えられるとのことであった。生活習慣との関連から，アルバイトの影響について質問があったが，経済的に恵まれた学生でも日本社会における交流を目的としてアルバイトを行うようであり，今回の調査では影響が無かったとのことであった。

第 B 会場

＜メディアと睡眠＞

座長　竹下達也（和歌山県立医科大学）

B－1　中学生におけるスマートフォンの使用状況とストレスとの関連性（川村小千代 他）

中学 1，2 年生を対象に無記名自記式調査を行い有効回答は 328 名であった。女子の不機嫌・怒り感情に関連する要因として，2 年以上の使用，以前にガラケーの使用，インスタグラム，カカオトークの使用，起床時，帰宅後，トイレ中，入浴中，就寝前，移動中の使用，5 分以上通話者，歩きスマホという要因が抽出された。重回帰分析（ステップワイズ法）では，歩きスマホと移動中の使用が有意な関連要因であった。急速に生徒に普及しつつあるスマホの使用とストレス反応への影響に関する貴重な報告であった。

B－2　子どもに対する客観的健康評価 －疲労と睡眠の関連について－（大川尚子 他）

小学 6 年生 158 名と中学 1 年生 113 名を対象に，睡眠と疲労の関連に関する調査を行った。睡

眠と疲労に関して質問紙調査を行い，客観的な疲労評価にはライフ顕微鏡を用いて，活動量，居眠り回数，睡眠時間など評価を行った。学校段階があがると，身体疲労，精神疲労などの自覚的疲労度が高くなり，活動量が低く，居眠り回数が増加することが確認された。また，睡眠時間が長い(8 時間以上)方が，身体疲労，精神疲労が低く，活動量が高く，居眠り回数が減ることが示された。十分な睡眠確保の重要性を示唆した興味深い報告であった。

B－3　中学生におけるネット依存傾向と睡眠習慣および身体的・精神的症状との関連

（森下美佳 他）

公立中学校 4 校の 1･2 年生 507 名を対象に，郵送法で無記名自記式質問紙調査を実施した。ネット依存，睡眠の質，朝型-夜型，症状などの項目について調査した。ネット依存あり群では，PSQI 得点が高く睡眠の質の低下がみられ，夜型傾向がみられ，身体的・精神的症状得点が有意に高値であった。パス解析の結果，身体的･精神的症状には，ネット依存と睡眠の質の低下からの直接効果，およびネット依存が夜型化や睡眠の質の低下を招いて症状を増加させる間接効果が認められた。ネット依存の予防に向けて貴重な報告であった。

＜食育・歯科保健＞

座長　藤原 寛（京都府立医科大学）

B－4　食に関する課題のある児童生徒への介入効果 －作業療法士による栄養教諭へのコンサルテーション－（倉澤茂樹 他）

栄養教諭や担当教諭が，発達障害を有する児童生徒の食行動に関する支援計画の作成を支援するために，作業療法士が指導助言を行った。食事量の見直しや偏食の改善，食事時間の短縮などを達成目標とし，口腔過敏などの感覚特性のある児童生徒には適応行動に導けるよう行動の細分化や姿勢制御のための環境調整が有効であると示唆された。今後は，より多くの障害を有する児童生徒に対して，栄養教諭らが日常的な食行動の課題を見つけ，適切に指導し解決できる支援計画書の作成に向けた作業療法士による有効な助言を期待する。

B－5　中学生における塩分摂取量が血圧に及ぼす単独および肥満との複合影響（長友奈央 他）

高血圧を呈する頻度の少ない成長期の中学生を対象に，高血圧は塩分摂取量の単一因子なのか，肥満と塩分摂取量の重複因子であるかを検証した。塩分摂取量と収縮期血圧の高値は有意な関連があり，肥満者も非肥満者に比して血圧高値を示し，肥満者の過剰な塩分摂取は高血圧を増悪させる傾向にあり，肥満にともなう食塩感受性の亢進が示唆された。過食傾向にある肥満者の食塩感受性が亢進する機序は，日常的な添加物を多く含む食品の過剰摂取の影響も考えられ，摂取食品と塩分摂取量や肥満との関連性について詳細な検討を期待する。

B－6　大学生の歯科保健に対する認識について

（楠本久美子）

養護教諭課程にある学生の歯科口腔衛生に関する知識の習得と歯磨き習慣の定着を目指し，歯科保健の講義の前後で教育効果を検証した。講義後は歯科衛生に関する知識を習得し，歯磨き習慣も定着していた。多くの学生は小学校時代の歯磨き指導に好意的な印象を持ち，歯磨き習慣も定着していたが，加齢にともない歯磨き習慣の指導効果が脆弱する傾向がみられ，中学校や高校においても歯科保健に関する実践教育が必要であると考えられた。今後，歯科衛生を学習する機会が少ない一般の大学生にどのような指導法が有効かを検証する必要があろう。

＜育児と教育＞

座長　森岡郁晴（和歌山県立医科大学）

B－7　大学生の献血に関する意識と実態

（藤原 寛 他）

保育・幼児教育課程を履修する大学生 384 名に献血に関する意識や経験を質問紙調査で尋ねたところ，361 名から回答が得られ（男子 207 名，女子 154 名），献血経験は男子 32 名，女子 14 名であった。献血した動機は「団体献血の機会があ

った」が最も多く，献血をしない理由は「機会がない」がもっと多かった。意識やイメージは肯定的な見解と消極的な見解に分かれた。このような違いは，教育の内容やねらいに関連するのか，きっかけづくりの大切さについてなどの質問があった。

B－8　大学生のクラミジア感染症とエイズ/HIV感染症の認知（櫻木鈴菜 他）

看護系大学の 1 年生 94 名にエイズ／HIV 感染症・クラミジア感染症の認知項目等を尋ねたところ，59.6%から回答が得られた。エイズ／HIV 感染症に認知度は高かったが，正しい予防方法を認知している割合は十分でなった。一方，クラミジア感染症は認知度が低く，関連する知識の認知も低かったことから，性感染症の予防と避妊とを混同している可能性があることが報告された。この調査の前に講義を受けているのかの質問や，中学校におけるエイズ教育などについて議論がなされた。

B－9　学校におけるがん教育ー兵庫県での展開ー（中村晴信 他）

兵庫県において取り組んでいるがん教育について，がんの教育に関する協議会の立ち上げ，平成27年度のモデル校において実施された講演会や研修会，平成 28 年度の講演会や研修会の紹介があり，講演会で行われたアンケート調査の結果では，日常生活習慣の改善，がん検診の受診率の改善が見られたが，基本的な知識の習得が不十分な点も見られたとの報告であった。奈良県との違い，外部講師は誰に依頼しているのか，講義時間はカリキュラム内なのかなどの質問があった。

第 C 会場

＜疾患と生活習慣＞

座長　高野知行（びわこ学園医療福祉センター野洲）

C－1　思春期 1 型糖尿病者における起立性低血圧の検討 －米国サマーキャンプ参加者を対象として－（丸谷 康 他）

起立性低血圧の関連因子を明らかにするため 35 名の思春期 1 型糖尿病者を対象に，座位から立位への循環反応を評価する Sit-Up 試験を実施した研究である。起立性低血圧群の女性は BMI が高く，座位 SBP が高血圧であることを示し，また，座位 SBP および ΔSBP と家庭での運動時間との間の関連性を導き出した。Sit-Up 試験は起立性低血圧の早期発見のために簡便に実施できる検査であり，これらの結果は療養指導に有用な指標になるものと思われる。

C－2　若年者における上腕-足首間脈波伝播速度の性別・年齢別ノモグラムの有用性の検討（内川友起子 他）

動脈壁硬化度の非侵襲的で簡便な指標である上腕–足首間の脈波伝播速度（baPWV）を計測し，若年者における心血管疾患のリスク評価についての有用性を検証した研究である。対象は近畿地区の中学校および高等学校の生徒で，循環器疾患，糖尿病，腎疾患の既往のない 12~18 歳の 2,255 名であった。解析の結果，若年者においても baPWV は高血圧，脂質異常，耐糖能異常と関連することを示し，心血管疾患リスクの指標として有用であることを示した。

C－3　過去20年間の和歌山県における川崎病罹患者と冠動脈後遺症の疫学（北野尚美）

川崎病の発生と治療の変遷および冠動脈後遺症の合併についての基礎資料を得ることを目的とした記述疫学研究である。1996 年（前期），2005 年（中期），および 2014 年（後期）からの各 2 年間について，和歌山川崎病研究会が実施したデータが解析された。冠動脈病変の発生率は前期 8.4%，中期 3.3%，後期 2.9%で，免疫グロブリン大量療法の投与法や免疫抑制薬の使用による治療法の変遷が考察された。これらの解析結果は，川崎病の既往歴を有する児童・生徒の学校生活管理に貴重な指針を提供し得るものと思われる。

＜物理的要因と健康＞

座長　中村晴信（神戸大学）

C－4　学校教員の熱中症に関する知識ならびに意識について（松尾浩希 他）

小・中・高等学校，中等教育学校および特別支援学校に在籍する体育・保健体育担当教員を対象に，熱中症に関する知識や意識の現状について調査した研究である。本調査の対象者は熱中症に関する講演を受講しており，受講による熱中症の知識や意識の向上がみられたが，受講前の段階では，必ずしも熱中症について理解や対策が進んでいるとは言えない結果であった。熱中症による事故が漸増し，その中には死亡事故も含まれる現状を鑑みれば，本調査は熱中症に対する理解や対策を促すことが急務であることを訴える貴重な調査であるといえる。

C－5　小学校教職員における紫外線による健康被害についての意識調査（浅井千恵子 他）

小学校教職員を対象に，紫外線による健康被害や教育に関して調査を行った研究である。その結果，自分自身の紫外線対策については男性に比べて女性で意識が高かった。また，教育現場での紫外線対策の指導の必要性は認識されているものの，実際に指導を行っている例は少なく，保護者から紫外線対策について依頼された例も相当数あった。紫外線は健康被害と健康への有用性の両面を持つため，この両面を考慮したうえで，今後紫外線教育を展開することが望まれる。

C－6　小学生における縄跳び可能回数と各種の筋機能との関係（中川辰樹 他）

小学生を対象に縄跳びの回数と筋機能との関係について検討した研究である。発達段階において，伸張・短縮サイクル動作の遂行能力を向上させることは，スポーツだけではなく日常生活でも有用である。本研究ではそのための方法として縄跳びを取りあげ，結果として 20m 走タイムやリバウンドジャンプ指数など，各種筋機能との関係がみられ，縄跳びの有効性が示された。縄跳びは，低コスト且つ簡便な方法であるため誰にでも実施することが可能であり，学校現場におけるトレーニング方法としての可能性を示した研究といえる。

＜危険行動防止・進路指導＞

座長　大川尚子（関西福祉科学大学）

C－7　中学校教員の薬物乱用防止教育に対する意識の実態把握及び関連要因（上田裕司 他）

学校における薬物乱用防止教育のさらなる定着を図るため，中学校教員の薬物乱用防止教育に対する意識の実態を把握するとともに推進の方策を検討するために，京都市内の公立中学校の教員を対象に調査を実施されその結果を報告された。防止教育に対する意識や喫煙，飲酒，薬物の指導内容の認知について，各教科教員と保健体育科教員との間に有意な関連が認められた。今後，この研究結果を生かした薬物乱用防止教育の研修が各教科教員を対象に開催されることを期待する。

C－8　社会的養護を必要とする者の進路選択の要因分析 －聞き取り調査の結果から－（岡田駿平 他）

社会的養護を必要とする者が，施設退所（高校卒業）するにあたって，進路を決定する際にどのような要因が影響しているのか聞き取り調査を行い検証された結果を報告された。就職者が進路を決定した要因は，人間関係・保護者が影響を与えていた。進学者が進路を決定した要因は，経済面・本人の意思・施設側の協力が影響していた。また，どちらにもインターン・ボランティア等の経験・ロールモデルの存在が影響を与えていることが明らかになった。今後，調査対象者を増やし，キャリア教育の充実を含めさらなる就学支援について検討されることを期待する。

C－9　活発な活動をしている保育園児の衝突回避能力について（宮本邦彦 他）

発表者らが開発された衝突回避行動を疑似的に観察測定する装置と衝突回避能力指標（接触生起率）を使い，保育園児の衝突回避能力を測定

し幼稚園児と比較した結果を報告された。保育園児は幼稚園児より接触生起率が有意に低く，保育園の内外で活発な活動をしている保育園児の衝突回避能力が高いことが示唆された。今後，幼稚園児と同じ年齢の保育園児についても同様の測定を実施され，幼児期の運動の効果を明らかにされることを期待する。

3. 特別講演報告

「ジャイアントパンダ飼育といのちのつながり」

座長　内海みよ子（和歌山県立医科大学保健看護学部）

演者：熊川智子（アドベンチャーワールド）

特別講演は，アドベンチャーワールドの熊川智子氏に「ジャイアントパンダ飼育といのちのつながり」についてご講演いただきました。アドベンチャーワールドには，5 回の出産と 8 頭の子育てをしている「良浜（らうひん）」というベテランの母パンダが生活しています。この長年のジャイアントパンダの出産や飼育の経験から，「子どもの頃に母親と多くの時間を一緒に過ごし，社会性の基が築けているパンダが，子育て上手な母パンダに成長している。」とうかがい，人が必要以上に手をかけるのではなく，パンダらしさを見守るかかわりの大切さを教えていただきました。

パンダの子育て中の動画も見せていただき，母パンダのしぐさや鳴き声などから感じられる母性にとても感動いたしました。生き物すべてに共通している母と子の姿ではないかと感じました。

人の子育ても時代の流れと共に変わってきているように思います。今回の学会は「すべての子どもが生き生きと過ごせる環境を目指して」をテーマとしました。学会に参加された皆様が，パンダのかけがえのない命の継続のお話を通じて，日ごろの子どもとのかかわりについて，問題解決思考ではなく，子ども一人ひとりが安心して自信を持って生活できる環境の大切さを考えていただくきっかけになればと願っています。

4. 教育講演報告

「いのちの教育と自尊感情」

座長：宮下和久（和歌山県立医科大学医学部）

演者：近藤　卓（日本ウェルネススポーツ大学）

教育講演として「いのちの教育と自尊感情」のテーマで，日本ウエルネス大学　近藤　卓教授の講演を拝聴した。

講演は，先生の長年にわたる中・高校でのスクールカウンセラーとしての実体験から，また，心理学者のとして研究結果から導き出された自らの理論で，大変わかりやすくしかも説得力のある内容構成であった。

「こころ」をつくる根源は，「愛」であり，ひとと人とが並ぶ関係で，一緒に豊かな時を過ごす，共有体験から生まれて来る，共有体験することで「こころ」がつくられていく。

わが国では，1990 年ころから，「自信」を喪失したこどもの存在が指摘され，その根本として「自尊感情」が低いことが指摘されてきた。その対応として「子供をほめて育てる」ことが推奨され，「人より優れていること」つまり社会的自尊感情の涵養が強調された。これは，他者との比較でどこまでも際限なく，相対的，条件付きで表面的で一過性の感情しか育まない。これに対して，演者は基本的自尊感情の涵養の重要性を説いている。基本的自尊感情は，いわば無条件の愛ともいうべきもので，生まれてきてよかった，生きていていい，このままでいい，これ以上，これ以下でもない，他者との比較でなく，絶対的，無条件，根源的で永続性のある感情が大切である。一つの共有体験が一枚の紙だとすると一枚一枚の体験の積み重ねが，一枚一枚にのりがついて一つの塊を形成する。これが感情の育成を意味する。この社会的自尊感情の発達と，基本的自尊感情の発達のバランスで，そのこどものこころの在り方を測定できる。社会的基本的自尊感情テスト（Social and Basic Self-Esteem Test）により，「低く安定した自尊感情」，「大きく安定した自尊感情」，「低くて弱い自尊感情」，「肥大化して不安定な自尊感情」の 4 つのそれぞれのタイプとしてとらえられる。これによって，バランスの取れた自尊感情を育むためにどのようなサポート

が必要になるかが明らかとなる。

「愛」が「こころ」をつくる鍵である。その重要性を講義だけではなく，中島みゆき「誕生」ほか3曲の音楽(演者自らのギター演奏とボーカル)を交え，終始，和やかで有意義な講演であった。

5. 平成 29 年度近畿学校保健学会奨励賞

選考委員会による審査の結果,次の者が平成29年度近畿学校保健学会奨励賞として採択された。

長友奈央（和歌山県立医科大学大学院保健看護学研究科）

演題：中学生における塩分摂取量が血圧に及ぼす単独および肥満との複合影響

（抄録は P.12 に掲載）

6. 学会印象記

長友奈央(和歌山県立医科大学保健看護学研究科)

この度は，近畿学校保健学会奨励賞に選出していただき,誠にありがとうございました。近年,過食,高脂肪食の摂取,インスタント食品やファストフードの利用が増えたことで，子どもたちのなかにも肥満や塩分の摂取過多の傾向が認められています。今回発表させていただいた研究は,中学生を対象に,スポット尿から推定した塩分摂取量と肥満が血圧に及ぼす影響を検討したものです。この時期は高血圧の頻度は少ないものの，塩分の摂取過多や肥満は血圧を上昇させる要因として重要であり，各々が重複することによる相乗的な影響も示されました。発表を終えた後には,多くの先生方から貴重なご意見・ご指摘をいただきました。今後は,それらをふまえて，研究内容をさらに深化させていきたいと思います。

午後の特別講演では，長年ジャイアントパンダの飼育に携わってこられた熊川先生のお話しを聞き，母親パンダが子どもとの愛情を育みながら，ともに成長していく過程を貴重な映像を通して感じることができました。また,教育講演での近藤先生のお話からは，共有体験を重ねることで基本的自尊感情が培われ，それを土台に社会的自尊感情をバランス良く積み上げていくこと，そのために周囲の大人が子どもをよく理解してさまざまな経験ができるように援助していくことの大切さを学びました。

この学会に参加して,学校の教育関係者,保護者,地域の保健医療者が連携しながら,子どもたちの健やかな成長を見守っていく環境づくりが重要であることを再認識しました。私は,臨床看護師として医療現場で働いていますが，疾患を抱える子どもたちと関わるなかで，日々の生活を健康で生き生きと過ごせるような支援を今後も心がけていきたいと思います。

最後になりましたが，このような機会を与えてくださいました第64回近畿学校保健学会会長内海みよ子先生に心よりお礼を申し上げます。

小島奈々（兵庫教育大学大学院）

学会で初めて口頭発表させていただいたのが,7 月 1 日に行われた近畿学校保健学会でした。和歌山県立医科大学保健看護学部の立派な広い会場と,大きなスクリーンを目の前にすると,いつもより緊張しましたが，座長の先生方をはじめ参加者のみなさまからご質問やご意見をいただき,今までの研究を振り返り,深める良い機会だったと感じています。今後実施予定の本調査に向け,健康課題を抱える児童・生徒の課題解決に役立つような研究となるよう，今回いただいたご意見も含めさらに検討を重ねていきたいと考えています。

午後からの特別講演では，アドベンチャーワールドの熊川智子先生のお話を聞き，お母さんパンダの子パンダへの愛情はもちろんでしたが,動画を見せていただいて，飼育員さんたちのパンダへの愛情を感じることができました。教育講演では,基本的自尊感情を育むためには,共有体験が大事だというお話がとても印象に残りました。すべての子どもが生き生きと過ごせる環境を目指して，私たちが目指す道筋を示してくれた講演だったのではないかと思いました。現場に戻った際には，子どもたちに寄り添い成長を見守りながら，充実した学校生活が送れるよう支援していきたいと思います。

また，懇親会では多くの先生方と交流を深め

ることができました。これからも励まし合い切磋琢磨しながら，学び続けていければと思います。改めて参加させていただけたこと深く感謝し，近畿学校保健学会の益々の発展を祈念いたしまして印象記とさせていただきます。

遠藤 朝（尼崎市立成文小学校）

私は小学校で教員として勤めており，普段は子どもたちと楽しいこともしんどいことも，共にチャレンジしながら日々を過ごしています。子どもたちの感情や表現は本当に豊かで，いつも驚かされることばかりです。その一方で，もっと子どもたちが主体的に取り組めるようなアプローチはなかったのだろうか，深い学びを与えられているのだろうか，と反省することがあります。また，職務に追われ，余裕がない状況で子どもたちと接してしまっていることも少なくありません。そんな環境から少しはなれ，今回，学会に参加し，一般演題や講演を拝聴できたことは，自分自身を客観的に見つめ直す良い機会となりました。

特別講演『ジャイアントパンダ飼育といのちのつながり』では，パンダ誕生の瞬間や母親パンダの成長などのお話を貴重な映像とともにしていただきました。教育講演『いのちの教育と自尊感情』では，子どもたちにとって，「共に感じる」ことは，自尊感情を高めるために重要であることを，心に響く音楽とともにお話していただきました。普段は，教える立場として教壇に立っていますが，今回は聞く立場として，新たなことを知れるという新鮮さと，学校の子どもたちの姿と重ね合わせて考えられるという興味深さがありました。最後には，私自身が「生き生き」とした気持ちになっていました。

今後も，新しい発見を求め，努めていこうと思います。貴重な機会をいただけたことに感謝申し上げます。

第 64 回年次学会風景

特別講演（熊川智子先生）

教育講演（近藤 卓先生）

学会奨励賞表彰式

平成 29 年度近畿学校保健学会奨励賞

中学生における塩分摂取量が血圧に及ぼす単独および肥満との複合影響

○長友奈央[1)]，宮井信行[1)]，内川友起子[1)]，有馬美保[2)]，北口和美[3)]，
内海みよ子[1)]，宮下和久[4)]，有田幹雄[1)]，武田眞太郎[4)]

1）和歌山県立医科大学大学院保健看護学研究科，2）関西医療大学
3）姫路大学，4）和歌山県立医科大学医学部衛生学教室

キーワード： 中学生，血圧，塩分摂取量，肥満

【はじめに】中学生における高血圧の頻度はわずかであり，その程度も軽いために症状が発現することは稀であるが，臓器障害を合併する率が高いことや，高い確率で成人期に移行することが問題とされている．食塩は，高血圧の成因において特に重要であるが，近年の食の欧米化やインスタント食品，食肉加工品，ファストフードの利用増加によって，肥満とともに塩分の過剰摂取が指摘されている．このような食環境の変化は血圧上昇の誘因となるものと推察されるが，この点に関する知見は本邦では依然十分とはいえない．そこで本研究では，中学生を対象に，スポット尿による塩分摂取量の推定を行うとともに，血圧に及ぼす単独および肥満との複合影響について横断的に検討を行った．

【対象と方法】 対象者は，A 県内の某中学校に在籍した生徒 305 名(平均年齢 13.5±1.0 歳)であった．対象者には，身体計測として身長と体重を測定し，BMI (kg/m2)を算出した．また，静穏な室内で臥位にて安静を保持した後，デジタル自動血圧計(オムロン製 HEM-907)を用いて，右上腕部より収縮期および拡張期血圧を測定した．測定は 3 回実施し，2 回目と 3 回目の平均を代表値とした．さらに，起床後第 2 尿を採取してナトリウム(Na)とクレアチニン(Cr)を測定し，高血圧治療ガイドライン 2014 の推奨する計算式を用いて塩分摂取量を推定した．肥満の判定には，国際肥満専門部会(IOTF)による小児用(2～18 歳)の BMI 肥満判定基準を使用した．

【結果と考察】 対象者における起床後第 2 尿から推定した1日あたりの塩分摂取量は3.2～15.8g に分布し，平均は 7.5±1.9g であった．また，男子は女子に比べて多く，男女間に有意な差が認められた（7.9±2.2g vs. 7.2±1.7g, P=.007）．

男女別に塩分摂取量の 3 分位数（tertile）を求め，その値を基準に対象者を 3 群に分類し（低塩分群：N=103, 中塩分群：N=105, 高塩分群：N=97），性と年齢の影響を補正して血圧を比較した．収縮期血圧は，低塩分群＜中塩分群＜高塩分群の順に連続的に高値となり（傾向性検定 P<.001），有意な主効果が認められた（共分散分析 P=.001）．一方，拡張期血圧では群間に有意な差は認められなかった．

IOTF による性別･年齢別の基準を用いて判定した結果，45 名（14.8%）が肥満（成人で 25kg/m^2 以上に相当）と判定された．肥満者と非肥満者において，塩分摂取量の 3 群の血圧を比較すると（表），収縮期血圧は，肥満者と非肥満者ともに低塩分群から高塩分群になるにつれて高値となったが，群間の差は肥満者の方がより大きく（肥満者：η^2=.272, 非肥満者：η^2=.015），主効果は肥満者のみで有意となった（共分散分析 P=.002）．

また，階層的重回帰分析を行った結果，塩分摂取量は性と年齢, BMI の補正後も収縮期血圧と有意な関連を示した（β=.112, P=.022）．さらに，BMI と塩分摂取量の交互作用項（中心化処理後）を投入すると, BMI の主効果とともに交互作用が有意となり（β=.111, P=.021），BMI と塩分摂取量の要因の相乗効果が認められた．

以上のように，中学生においても塩分摂取量が多い者では収縮期血圧が有意に高値を示した．また，肥満者では高塩分摂取による血圧上昇が非肥満者よりも大きい傾向にあり，肥満に伴う食塩感受性の亢進が示唆された．

表．肥満者と非肥満者における推定塩分摂取量の 3 分位による血圧の比較（共分散分析）

	収縮期血圧 (mmHg)	拡張期血圧 (mmHg)
肥満者		
低塩分群（N=11）	110.2±8.3	63.1±6.0
中塩分群（N=12）	115.1±6.5	62.7±6.8
高塩分群（N=22）	118.9±5.9	65.5±6.1
共分散分析 [A]	.002	.501
傾向性検定	＜.001	.259
効果量（η^2）[B]	.272	.044
非肥満者		
低塩分群（N=92）	105.2±7.4	59.7±5.8
中塩分群（N=93）	106.0±7.2	59.7±6.0
高塩分群（N=75）	107.6±8.7	59.2±6.0
共分散分析 [A]	.150	.839
傾向性検定	.052	.565
効果量（η^2）[B]	.015	.001

平均±標準偏差
[A] 性と年齢の影響を補正
[B] 効果量：η^2＝.010（小），η^2＝.060（中），η^2＝.140（大）

平成 29 年度近畿学校保健学会
評議員会・総会　報告

日時：平成 29 年 7 月 1 日（土曜日）
13：00～14：00
場所：和歌山県立医科大学保健看護学部（三葛キャンパス）大会議室（研究棟 1 階）

議題

1. 平成 28 年度事業報告
2. 平成 28 年度決算報告及び会計監査報告
3. 平成 29 年度予算案
4. 名誉会員の承認
5. 第 65 回近畿学校保健学会 開催地及び会長
6. その他

1. 平成 28 年度事業報告

1）会員数
263 名（名誉会員 14 名を含む，平成 29 年 3 月 31 日現在）

2）会議開催，学会通信など

・幹事会
平成 28 年 5 月 21 日
第 1 回近畿学校保健学会幹事会開催
（於：滋賀医科大学）
［平成 28 年 4 月 23 日　近畿学校保健学会平成 27 年度会計監査（於：大阪教育大学）］
平成 28 年 9 月 24 日
第 2 回近畿学校保健学会幹事会開催
（於：ホテルアウィーナ上本町）
平成 29 年 1 月 22 日
第 3 回近畿学校保健学会幹事会開催
（於：大阪教育大学）

・常任幹事会
平成 28 年 4 月 23 日
近畿学校保健学会常任幹事会開催
（於：大阪教育大学）
平成 28 年 8 月 21 日
近畿学校保健学会常任幹事会開催
（於：大阪教育大学）
平成 28 年 12 月 4 日
近畿学校保健学会常任幹事会開催
（於：やまと会議室）

・年次学会，評議員会及び総会
平成 28 年 6 月 25 日
第 63 回近畿学校保健学会年次学会開催
会長：高野知行（於：滋賀医科大学）
平成 28 年度評議員会及び総会開催
（於：滋賀医科大学）

・学会奨励賞
平成 28 年 6 月 25 日
平成 28 年度近畿学校保健学会奨励賞
「幼児における睡眠と生理指標及び唾液バイオマーカーとの関連性」
涂　静怡（滋賀大学教育学部）

・研修セミナー
平成 28 年 12 月 4 日
第 5 回研修セミナー開催
「子どもたちの理解と子どもたちへの関わり方～非行少年や犯罪者の特徴から考える～」
講師：竹下　三隆 先生　（元奈良少年刑務所教育専門官）　（於：やまと会議室）

・学会通信
平成 28 年 6 月 2 日
近畿学校保健学会通信 No.144 発行
平成 28 年 10 月 15 日
近畿学校保健学会通信 No.145 発行
平成 29 年 3 月 3 日
近畿学校保健学会通信 No.146 発行

近畿学校保健学会会員数

平成 29 年 3 月 31 日現在

所属	名誉会員	評議員	一般会員	計
滋賀県	1	12	29	42
京都府	3	12	23	38
大阪府	6	21	42	69
兵庫県	3	18	41	62
奈良県	1	6	12	19
和歌山県	0	11	22	33
計	14	80	169	263

年度	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
会員数	315	312	287	314
年度	平成27年	平成28年		
会員数	294	263		

＊所在不明会員 14 名は平成 28 年 3 月で退会扱いとした。

（各年度 3 月 31 日現在）

名誉会員名簿（14 名）

平成 29 年 7 月 1 日現在

年	氏名	所属
平成 14 年	玉井　太郎	大阪
平成 15 年	後藤　英二	大阪
平成 16 年	大山　良徳	大阪
平成 16 年	美崎　教正	兵庫
平成 17 年	近藤　文子	兵庫
平成 22 年	勝野　眞吾	兵庫
平成 24 年	小西　博喜	京都
平成 24 年	寺田　光世	京都
平成 24 年	八木　保	京都
平成 26 年	大矢　紀昭	滋賀
平成 26 年	堀内　康生	大阪
平成 26 年	三野　耕	大阪
平成 27 年	山本　公弘	奈良
平成 28 年	藤本　正三	大阪

2. 平成 28 年度決算報告及び会計監査報告

【収入】　　平成 29 年 3 月 31 日現在

	予算額	決算額	増減額	摘要
会計収入	750,000	706,000	-44,000	会費@3,000 円×235 人, 1,000 円×1 人
第4回研修セミナー	0	0	0	
雑収入	0	0	0	
前年度繰越金	513,101	513,101	0	
合計	1,263,101	1,219,101	-44,000	

【支出】

	予算額	決算額	差額	摘要
印刷費	100,000	52,610	-47,390	学会通信(No.144～146)
郵送費	100,000	83,454	-16,546	学会通信発送, 振込手数料等
事務費	50,000	42,352	-7,648	学会通信発送封筒代
人件費	100,000	73,500	-26,500	事務雇用費, 会議交通費等
会議費	30,000	43,366	13,366	常任幹事会, 幹事会 (年3回)
第5回研修セミナー	30,000	37,400	7,400	手土産代
役員選挙積立金	33,000	33,000	0	
年次学会補助金	150,000	150,000	0	和歌山・第64回事務局へ
ホームページ維持費	100,000	88,560	-11,440	年間契約 (ｱｰｶｲﾌﾞ作成費含む)
学会奨励賞（年会費）	3,000	3,000		
予備費	567,101	0	-567,101	
小計	1,263,101	607,242	-655,859	
次年度繰越金	0	611,859	611,859	
合計	1,263,101	1,219,101	-44,000	

平成 29 年 5 月 7 日

監事　宮井信行

監事　平井美幸

3. 平成 29 年度予算

【収入】

	予算額	前年比	摘要
会計収入	750,000	0	会費@3,000 円×250 人
第5回研修セミナー	0	0	
雑収入	0	0	
前年度繰越金	611,859	98,758	
合計	1,361,859	98,758	

【支出】

	予算額	前年比	摘要
印刷費	80,000	-20,000	学会通信(No.147～149)
郵送費	100,000	0	学会通信等発送，振込手数料等
事務費	50,000	0	学会通信発送封筒代，文具代等
人件費	100,000	0	事務雇用費，会議交通費等
会議費	50,000	20,000	常任幹事会，幹事会（年3回）
第6回研修セミナー	50,000	20,000	手土産代
役員選挙積立金	33,000	0	
年次学会補助金	150,000	0	京都・第65回事務局へ
ホームページ維持費	100,000	0	年間契約（データ作成費含む）
学会奨励賞（年会費）	0	-3,000	平成29年度より副賞（年会費免除）廃止
予備費	648,859	81,758	
小計	1,361,859	98,758	
次年度繰越金	0	0	
合計	1,361,859	98,758	

4. 名誉会員の承認

武田眞太郎（和歌山県立医科大学名誉教授・近畿学校保健学会評議員）

横尾能範（神戸大学名誉教授・近畿学校保健学会評議員）

北村陽英（奈良教育大学名誉教授・近畿学校保健学会評議員）

5. 第 65 回近畿学校保健学会 開催地及び会長

次期学会開催地：京都

会長：小谷裕実（京都教育大学教授）

平成 29 年度
第 1 回近畿学校保健学会幹事会議事録

日時：平成 29 年 6 月 3 日（土曜日）
15:00～17:00

場所：大阪教育大学　第 4 講義室

出席者：【幹事長】白石
【常任幹事】笠次，鬼頭
【幹事】（滋賀）高野，谷川
（京都）井上，藤原
（大阪）楠本，古角
（兵庫）西岡，森脇
（奈良）高田，辻井
（和歌山）松本，宮下
【監事】宮井

オブザーバー：内海（年次学会長）
（計 15 名敬称略・順不同）

欠席者：板持，藤居，上田，森，大川，後和，松永，吉岡，川畑，中村，春木，森岡，平井（監事）
（計 13 名敬称略・順不同）

開会に際し，平成 28 年 8 月 16 日に 92 歳で亡くなられた名誉会員の名誉会員米田幸雄（京都）に対して黙祷を捧げ，学会通信に追悼文を掲載することが了承された。

議　題：

1. 平成 28 年度会計報告および監査について
白石幹事長より資料をもとに平成 28 年度会計報告が説明され，会員の減少による収入の 44,000 円の減収，印刷費が 47,390 円削減できたことが報告された。また，宮井監事より適正に会計処理がなされていたことが報告され，指摘カ所の修正後，承認された。

2. 平成 29 年度予算案について
白石幹事長より資料をもとに平成 29 年度予算案が説明され，原案通り評議員会および総会に諮られることになった。

3. 平成 28 年度事業報告について
白石幹事長より資料をもとに報告され，了承された。

4. 第 64 回近畿学校保健学会について
1）評議員会および総会の運営について
年次学会当日の 13 時 00 分～14 時 00 分に進行することとし，司会は前回の年次学会長の高野知行先生（びわこ学園医療福祉センター野洲）に依頼することで，了承された。
2）年次学会について
内海学会長より学会通信 No.147 に掲載予定の資料をもとに詳細に説明され，了承された。
大会スローガンは「すべての子供が生き生き

と過ごせる環境を目指して」とし，既にポスター作成するとともに，配布し，参加呼びかけていることが報告された。

5. 名誉会員の推薦について
和歌山地区より武田眞太郎先生（和歌山県立医科大学名誉教授），神戸地区より横尾能範先生（神戸大学名誉教授），奈良地区より北村陽英先生（奈良教育大学名誉教授）の推薦があり，各代表幹事より資料をもとに説明され，全会一致で 3 名の先生方を名誉会員として推戴することが決まり，評議員会および総会に諮られることになった。

6. 次期年次学会（第 65 回近畿学校保健学会）開催地および会長について
次期学会開催地である京都地区の井上代表幹事より，学会長は京都教育大学小谷裕実教授とする報告がなされ，了承された。会場は京都教育大学であるが，日程は未定とし，他学会の開催日程との調整が必要であることが報告された。

7. 第 6 回セミナーについて
鬼頭常任幹事よりセミナーの趣旨には学会員になってもらうことも含まれており，内容について意見があれば申し出て欲しい旨の依頼がなされた。

8. その他
白石幹事長より学会新企画の第 5 回「研究の発表」については藤原 寛幹事（京都）に執筆をお願いしていること，また第 6 回「論文にまとめる」の執筆者について別途依頼することが報告された。

報　告：

1. 学会通信 No.147 号の内容について
白石幹事長より第 64 回年次学会のプログラムが中心となることが報告され，第 3 回学校保健学会幹事会議事録について，「学会奨励賞の副賞の取扱い」に関する文書は削除することとなった。

2. その他
白石幹事長より日本創傷外科学会からの連携依頼について説明がなされ，連携の具体的内容も分からないこともあり，宮下幹事（和歌山）より和歌山県立医科大学形成外科教授を介して情報を得ることとなった。

学会新企画

第５回　研究を発表する

京都府立医科大学　藤原 寛

はじめに

自分の研究成果を発表することは，他の研究者の評価とともに問題点や今後の研究の方向性が見えてくるものです。研究発表は，晴れ舞台であり，慣れないと緊張するものです。また，視聴者に分かりにくい内容や不鮮明なスライドになると興味も薄れ，視線もスライドから離れてしまいます。発表が成功しないと研究自体が台無しになることもあります。よって，発表に課せられる責任と緊張はより増してくるのも事実で，今後の研究意欲をなくしてしまうことにもなりかねません。こうした研究発表における「分かりやすい表現」の技術には普遍的な共通項があるはずです。そうした共通項から「分かりやすい表現」の純粋結晶が抽出されれば，発表の重要なガイドラインになると考えました。

「分かりやすい発表でしたね」と言われることは，とてつもない喜びで，発表で伝わった内容はもちろんですが，それをスキルとしてキャリアを重ねることが重要で，発表する能力は間違いなくキャリアアップにつながり，研究内容が充実し，発表意欲も高まってくるものです。本稿は，発表経験の少ない研究者にとって，研究発表のスキルアップの参考になればと思い，次のような構成で整理してみました。

1. 過去の発表事例から「分かりにくい発表」の原因を確認する。
2. 「分かりやすい発表」とは，そもそもどういうものかを考えてみる。
3. 今後の「分かりやすい発表」のルールを導き出す。

1. 発表のテーマ

発表の目的は，研究成果の伝えたい内容を分かりやすく伝えることであり，発表を「誰に」「何を」「どのように」伝えるかという三要素があります。学会や研究会での発表では，視聴者の多くは，演題名や抄録から何らかの興味・関心を持っています。演題名は，多くの参加者に聴講してもらうためには重要な要素になりますが，演題名はテーマであって伝えたいことではありません。よって，発表したい内容を細かく決めることで，伝えたいことが整理されると，発表手段や表現方法が決まってきます。発表の最大の目的を上手に話すことや美しいスライドを作成することにこだわる必要はありませんが，視聴者に理解してもらうに，「何をしなければならないのか？」には工夫が必要です。発表する研究の意図や独自性を明確に提示するためには，どのような研究背景があり，関連する先行研究を盛り込んだら理解してもらえるだろうかといったことを考えることから始まります。そして，それを達成するために資料作り，つまりパワーポイントなどのスライド作成が作業として発生します。そのうえでそれらの資料を使って，どのように話すべきなのか，という流れで発表は構成されるのです。

2. 発表の形式

学会や研究会での発表の方法は口頭発表やポスター発表に分かれ，演題発表を申し込む際に選択することができますが，主催者側から発表形式を指定されることもあります。どちらの形式が良いかよりも研究内容に興味がある参加者に深く説明を重ねていくことに替わりはありません。

以前の口頭発表では，抄録を読むだけの口頭発表やスライド，OHP を用いた発表などでしたが，最近の口頭発表は，プロジェクター，コンピュター（PC）を用い，アプリケーションとしてパワーポイントを用いた発表が主流となりました。口頭発表は独特の緊張感の中で大勢の参加者に対し，貴重な研究成果や情報にあふれたスライドを使用して熱意をもって巧みに発表し，発表後の質疑応答にも堂々と意見交換をしている場面が想像できます。

一方，ポスター発表では，研究の全体像が分かり，研究内容，結果，結論を凝縮したポスターを参加者が閲覧し，発表者と気軽に意見交換

できることから，興味ある研究者にとっては理解しやすく有用な発表形式と言えます。

3. 発表の展開

最近では，スライドによる授業は大学だけはなく，中高生や小学生にまで普及しています。スライドによる発表が「上手」であれば大きな成果が得られ,「下手」であると自信の喪失につながり，成功体験を得ることはできません。すると今後の研究発表に自信をなくし，緊張感も増すことになります。

小説や映画の基本となる起承転結を研究発表に応用すると,「起」は背景や目的など研究の動機,「承」は研究の対象や研究方法,「転」は研究結果や考察,「結」は結論（まとめ）と今後の研究の方向性や課題となります。小説や映画のようなわくわくするような起承転結は必要ありませんが，聞く側が短い時間で結論が理解でき，聞く側が納得できなければならない展開が重要となります。実際の発表では，相手が感心することよりも，納得できたかどうか，共感できたかどうかが重要で，そのためには伝わりやすいスライドと説得力のある話し方の相乗効果が必要です。しかし，準備したスライドの枚数が多いと発表時間を超過し，発表が早口になったり，準備したスライドを流すことになりかねません。聞く側を納得させるには，伝えたいことが記載されているスライドを選別し，それぞれを優先順位の高い順番に並べることで基本的なスライドの流れができます。

4. 発表の方法

1）口頭発表

発表はスライドの展開よりも重要なのが時間の使い方にあります。学会の規模により異なりますが，多くの学会での発表時間は 7 分～10 分で，質疑応答は 3 分～5 分ですから，一つの演題に与えられた時間は 10 分～15 分となります。よって，この時間内に，研究の概要や結果，結論をどのように分かりやすく発表するかを考える必要があります。聞く側が発表を聞いてくれる姿勢をもっていたとしても，時間のすべてを自己主張のために使うのでは，聞く側も飽きてしまいます。極端な場合，自慢話を聞かされたとも思われかねません。

発表会場には，通常，パソコンとプロジェクターは設置されています。よって，作成したスライドを保存した USB を持参するだけです。その際に気をつけなければならないのが，「解像度」です。パワーポイントの最新版は，画面の縦横比が 16：9 のワイド表示が標準で，最近では，より高解像度の表示が可能であり，文字バケや改行ミスが表示され，発表時に慌てることになりかねませんので事前に互いの相性を確認しておいたほうがよいでしょう。また，自分のパソコンを持参して発表する場合は，プロジェクターとの接続ケーブルの種類を事前に確認したほうが無難です。また，USB のコピーも必ず持参するようにしましょう。

発表する会場をチェックすることも必要です。会場の広さを確認することも重要で，大きい会場にも関わらず投影するスクリーンが小さい場合は，文字が小さくなり，後方の視聴者は読みづらくなります。特に，表やグラフの数字の大きさには注意しましょう。

2）ポスター発表

パネルのスペースは，学会により異なりますが，概ね，縦 180 ㎝×横 120 ㎝の用紙が掲示できるスペースが準備されています。A4 用紙なら 20 枚程度の掲示が可能ですが，枚数が多いと，結論やまとめが最下段になり，読みにくくなるので，事前に全体のレイアウトを考えたほうが良いでしょう。最近は，若干費用がかかりますが，模造紙 1 枚大に印刷するサービスもあります。ポスター全体のレイアウトを事前に考えて発注でき，見やすいポスターに仕上がります。

ポスター発表の場合，指定された討論時間にポスターの前で待機し，参加者からの質問に受け答えする形式と，口頭発表する時間は短いですが，掲示したポスターの前で発表者を取り囲むように研究の概要を発表し，発表後に参加者と討議する形式があります。どちらの場合も発表内容をより厳選して発表することに変わりはありません。

パネル発表の利点は，図表の文字を小さくした詳細なデータを掲示することができます。また，写真などを掲示することができ，実践研究の様子を具体的に伝えることができます。参加者は，多くの発表の中から興味・関心のある発表を閲覧するが，より多くの参加者の評価を受けるには，カラフルなポスターよりも，研究成果をより厳選して，読みやすいポスターに仕上げることが良いと思われます。

自分のポスターを熟読されている参加者には，積極的に話しかけて，発表内容に関するコメントを聞くことは，研究に関する課題や今後の研究に有用なヒントを得ることも多く，気軽に話しかけましょう。

5. 発表の補足資料

補足資料は，研究目的を達成するためのツールですが，発表資料は可能な限り，抄録にまとめ，事前配布をせず，プロジェクターに表示されているスライドを視聴してもらうことを優先します。事前配布すると視聴者は手元の資料を見てしまい，発表者とのアイコンタクトも生まれません。ただし，資料の事前配布にメリットがないわけではありません。例えば，図表や数字などをスライドにすると文字が小さく見づらくなることもあり，スライドや抄録に記載できなかったデータを配布することもあります。また，参加者が興味ある演題の発表時間が重なった場合などを考慮して資料を準備することも必要かもしれません。その際には，配布資料が不足しないよう，事前に主催者が指定した枚数を確認してから持参することが望ましいでしょう。

6. 発表の一貫性と柔軟性

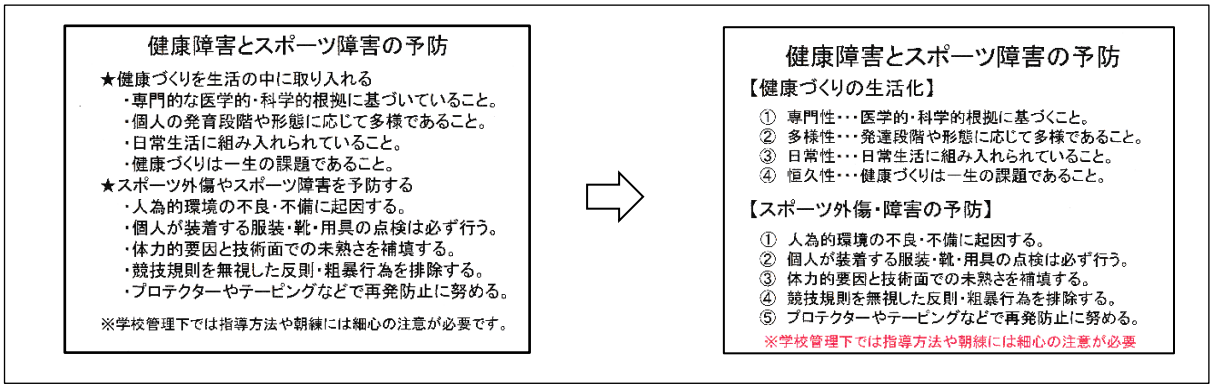
発表者の主張には，一貫性が必要です。一貫性とは，最初に主張したことは最後まで曲げないということです。たとえば，発表の冒頭で「健康に良い」という話から始まったら，最後まで「健康に良い」という主張を貫き，途中で「とは言っても，健康に悪いこともある」という展開は本質的には必要ありません。要するに，聞く側に何を主張したいか，何を譲ることができないかということを整理しておく必要があります。途中で主張が揺らぐと伝えたいことが正しく伝わらないこともあります。

また，研究発表の内容には柔軟性も必要です。何気なく記述されたスライド中の箇条書きに規則はありませんが，なぜその順番で並んでいるかには理由が必要です。例えば，最も重要と思われる順番や伝えたい気持ちの順番かもしれません。「これは何の順番ですか」と聞かれたときに即答できるくらい順番には気を使いましょう。もちろん「この順番に意味はない」というのも立派な理由です。

7. スライドの作成

発表スライドは，パッとみて分からなければ聞く側は興味を持ちません。美しいスライドを作ることより理解しやすいことを強く意識することが大切です。理想的なのは，読ませずに見せるスライドで，直感的にメッセージが読み取れるスライドです。しっかり読まないと分からないようなスライドを見せられても興味を持ってくれませんし，読んでもくれません。意識すべきことは，スライドの情報量を絞ることが不可欠で，何を言いたいかを明確にし，スライドに多くの内容や情報を提示するのは適切ではありません。発表会場の大きさがわかれば，事前にシュミレーションしておくことも良いでしょう。

スライド全体の統一感も重要で，色合いやフォントの種類やサイズがバラバラだと余計なことに気がいってしまいます。複数の人で作ったり，ネットの資料や他のスライドからコピペする際に，このようなことが起こりがちです。基本の色合いやフォントサイズなどのフォーマットは統一し，フォントサイズは一番遠くにいる人が見えるサイズが適切です。また，カラフルなスライドは不要で，イラストやアニメーションも減少傾向にあります。背景は白が無難で，最も自然です。文字やデザインに使う色も3 色が限度で，強調したい文字に赤色を使い，図形などにもう一色（青や緑）使います。また，



色覚に障害をもつ人は，赤と茶，オレンジと黄緑など微妙な色の違いが読み取れないこともあり，留意して作成してください。

話すのが苦手だから，話が下手でも読めば分かるという狙いもあるでしょうが，スライド内容を棒読みすると，視聴者は退屈になり興味を持たなくなってしまいます。スライドに話す内容をすべて書くことは慎みましょう。複数の項目を伝えたいときに使われる箇条書きも，上図のように複数の上位項目に，下位の項目があるとフォントサイズを下げるだけで何が重要なメッセージかが理解しやすくなります。

8. 発表時の注意事項

発表の第一声は，発表のイメージを決定づけます。声が小さければ，いかにも自信がないように聞こえ，発表自体の関心も薄れてしまいます。明るくはっきりした口調でスタートすれば悪い印象は与えません。話すスピードは1分間に 300～350 文字を読み上げるくらいのスピードが適当だと言われています。発表時に気になるのが口癖です。「えっとー」「実は」「要するに」など重要なことや意外なことを伝えるときなどの口癖は，一度耳にしたら気になるものです。また，発表の持ち時間が少なくなってくると早口になりがちです。発表の要点である「まとめ」のスライドまで確実に提示できるよう，余裕のある時間配分を事前にリハーサルをしておくことも必要です。発表時の視線も大切で，視線を落として発表原稿を読み続けるよりも，少し緊張するかもしれませんが，視線は視聴者に向けるようにしましょう。発表時の身だしなみも重要で清潔感のある地味な服装で臨みたいものです。発表の最初や最後の言葉もあらかじめ決めておき，視聴者への感謝を含め発表終了が明確に分かるようにすることも大切です。

9. 発表のまとめ

効果的な発表のまとめは，発表内容を整理するために必要です。「最後に，今回発表したことまとめますと…」と言い出す時間を作り，発表の冒頭の部分で使用したキーワードや研究課題をそのまま使用します。すると，発表が複雑に展開されたとしても，最初に戻ることで研究課題が再認識され，発表全体がまとまって見えるものです。展開してきたことを解説するだけで十分な発表のまとめになります。

分かりやすいスライドを作り，分かりやすく発表する。そして，視聴者に言いたいことが伝わり，自分の研究成果を理解してくれることが発表の理想で，確実に理解してもらうためには視覚よりも聴覚に訴えるほうが効果的です。しかし現実は甘くありません。発表会場では，一つのセッションで複数の発表がなされ，会場を出る頃には，残念ながら自分が発表した内容の大半を忘れていることが多いものです。欲張りは禁物ですが，研究成果のまとめは3つ以内に絞って発表を終えましょう。

10. 発表後の質疑応答

質疑応答時に，予想外の質問をされて，質問内容に上手く回答することができなかったと悔やんだ経験は誰にでもあります。

発表で最も大切な時間は質疑応答だといっても過言ではありません。発表終了後には3分～5分の質疑応答の時間があり，発表内容に対

して討論する機会が設定されています。発表時間を超過すると質疑応答の時間がなくなり，質問を受けることができなくなります。質疑応答は，発表で聞く側が理解できなかったことを質問する場ではありません。そんな質問が出てくる場合は，発表自体を見直したほうが良いでしょう。質疑応答は，視聴者から研究の方法や結論の妥当性など発表全体に関する意見交換が行われます。この質疑応答は，研究の有用性を客観的に評価される大切な時間で，聞く側の理解や納得が得られたら活発な意見交換がなされ質問も増えるものです。また，今後の研究の方向性をアドバイスが得られる重要な時間でもあります。緊張感から質問の意図が理解できずに壇上で困惑することがないように，質問内容を正確に理解するには，簡単なメモ書きすることも良いでしょう。

事前に予測される質問内容に対する所謂，「理論武装」も必要で質問の意図をしっかり把握し簡潔の応答できることを目指しましょう。予想外の質問に対して，その場を乗り切るために「今後の課題とします！」と伝家の宝刀のような返答をすることなく，質問者に対して謙虚な姿勢で誠実に返答してほしいと思うこともあります。また，発表終了後に質問者に直接アドバイスを求めることも今後の研究に役立ちます。余談ですが，質疑時間が短いにも関わらず，自分の研究成果や関連研究をダラダラと論じる質問者も見られ，お互いに短時間で簡潔な討論ができることが望ましいと思っています。

11. 分かりやすい発表のルール

1）親切・ていねいな心をもつ。

親切心は，「分かりやすい」の真髄です。視聴者の立場，目線で発表できるよう，できるだけ情報を整理し，理解しやすい発表を心がける。

2）視聴者の熱意を感じる。

発表内容に対する視聴者の関心の程度は重要で，実際以上に視聴者に関心があると思い込んで発表すると「分かりにくい」ことになる。

3）大前提の説明を忘れない。

発表者にとって当たり前過ぎることは，発表内容から省略することがある。自分の知識を過信することなく，発表の前提となる基礎的な知識は何かをチェックする。

4）最初に，研究の概要を説明する。

視聴者が研究発表の全容を理解するために，発表中に必要な知識を説明することもある。

5）複数解釈を許さない。

自分で思い込んでいる解釈とは異なる解釈を発見することには限界がある。思い込みや不明確な内容を第三者にチェックしてもらう。

6）発表の時間制限を守る。

発表速度が速くなると分かりにくい。短時間で発表できる内容量を考え，視聴者が理解できる厳選した表現を心がける。

7）発表内容を欲張らない。

発表内容を欲張ると本当に伝えたい内容の印象が弱まる。発表しなくてもよい補足内容を選び，思い切って省略または絞り込む。

8）発表に優先順位をつける。

時間，紙面のスペース，文字サイズなどを発表の重要度に応じて使い分ける。伝えたいなことや重要な内容は目立つように工夫する。

9）発表順序を明示する。

発表内容が別の研究の前提知識となっていることも多い。視聴者が理解するには，どの研究を先に提示するかを検討し，研究の前提となる関連研究の相互依存関係を明らかにする。

10）自然発想には逆らわない。

「この場合は，こうなる」という無意識な予測，予感を裏切る発表は，視聴者を混乱させる。多くの人が考えることに基づいて当然と思う発表内容を心がける。

最後に，研究発表は自分のためだけにあるのではなく，あくまでも相手のためにあるのです。発表が終わった後，自分自身が話し終わって満足するのではなく，相手が理解してくれたかどうかが重要です。研究発表の目的を「分かりやすい発表をする」としたときに，その目的を達成するために，この論考が参考になれば望外の幸です。

第６回研修セミナー

テーマ：「運動器検診についてー現場が抱える課題とその対応策を考えるー」

講　師：笠次 良爾 先生　（奈良教育大学保健体育講座教授，近畿学校保健学会常任幹事）

略　歴：平成 5 年奈良県立医科大学医学部卒業，亀田総合病院で 2 年間の初期研修後，平成 7 年に奈良県立医科大学整形外科学教室へ入局。整形外科医として 4 つの関連病院ならびに奈良県立医科大学附属病院で勤務後，平成 20 年から奈良教育大学保健体育講座准教授，平成 22 年から同教授，現在に至る。日本整形外科学会認定専門医，日本体育協会公認スポーツドクター，日本整形外科学会認定スポーツドクター，公益社団法人日本トライアスロン連合メディカル委員会委員長，アンチドーピング委員会委員長など。

要　旨：「学校保健安全法施行規則の一部を改正する省令」により，平成 28 年 4 月から学校定期健診に運動器検診の項目が加わりました。これは従来から実施されてきた脊柱側弯症のチェックに加えて，四肢の状態のチェックも加わったものです。この背景には体力や運動習慣の二極化とともに，過度の運動によるオーバーユース障害や運動不足による運動器への問題など，運動器に関しても様々な課題が学校現場で増加していることが導入の理由として挙げられています。ところで現場の養護教諭の先生方の声を聴いていると，その重要性はわかるが，一次スクリーニング時の基準が曖昧なこと，そのことに起因する陽性率の学校間格差，陽性項目に器質的疾患と機能的問題が混在していること，想定疾患がわかりにくいこと，内科検診に含められたことによる時間的な制約，調査票の整理に関する事務的な問題など，様々な課題が挙げられています。このセミナーでは，検診の意義，成長期の児童生徒の運動器を評価する上で注意すべきポイント，想定疾患，事後措置などについて，医師としての臨床経験を元に学校現場，スポーツ現場で活動する立場から課題を整理し，その解決法について提案したいと思います。

日　時：平成 29 年 12 月 23 日（土曜日・祝日）午後 2 時～4 時

研修先：大阪教育大学天王寺キャンパス　西館第 1 会議室

〒543-0054　大阪府大阪市天王寺区南河堀町 4-88　（最寄駅：JR 寺田町駅）

募集期間：10 月 20 日～11 月 20 日

定　員：50 名まで（先着順）

非会員の方の参加も歓迎します。参加希望の方は下記のアドレスまで「お名前，所属，連絡先（メールアドレス，お電話等）」をお送りください。

申込み先アドレス：kinkigakkohokengakkai@yahoo.co.jp

第 65 回近畿学校保健会（平成 30 年度年次学会）案内

・学会長：小谷裕実（京都教育大学 教授）

・大会テーマ：学校で生命の尊さを考えよう伝えよう

・日時：2018 年 6 月 30 日（土）

・会場：京都教育大学 F 棟（予定）　京都市伏見区深草藤森町 1

・プログラム

午前：口頭発表（演題募集）

午後：教育講演　『学校における「生命のがん教育」の取り組み』（仮題）

シンポジウム　『学校におけるセルフアドボカシーと合理的配慮を考える

ーLGBT，病弱，発達障害の当事者の語りを通してー』（仮題）

懇親会（予定）

【京都教育大学までのアクセス】

編集後記

この通信が届く頃，小・中・高等学校では運動会等の催し物で，大学では授業が始まるなど，皆様におかれましては忙しい毎日をお過ごしのことと思います。季節は長袖の似合う秋本番となりました。思えば，今年は梅雨時に雨が少なく，8 月に入ってからは季節が戻ったように雨の日が多かったと感じました。ウェザーニュースによれば，「日照時間や気温が西高東低」で東日本では日照時間が少なく，西日本では平年に比べて平均気温が高い状態が続いたとのことです。ニュースに流れる気象情報では「50 年に一度の・・・」という言葉が頻繁に耳に飛び込んできたようにも思います。また，台風期間が 19 日間という長寿となった迷走台風 10 号や 9 月の連休に本土 4 島にすべて上陸した台風 18 号は，飛行機での移動等に大きく影響し，旅程の変更を余儀なくされた方も多かったのではないでしょうか。

さて，和歌山で開催された学会も成功裏に終わることができました。主催された先生方に厚くお礼申し上げます。来年は京都で開催されます。懸案である学会員増加策を工夫し，学会を盛り上げていきたいと考えていますので，御協力よろしくお願いいたします。　（常任幹事　鬼頭英明）